

# 編集と誤読

—— 戦没学徒兵の手記をめくって ——

高 田 里 恵 子

## わだつみ vs 靖國

靖國神社遊就館は1993年に学徒出陣五十周年特別展を開催し、さらに翌年には『いざさらば我はみくにの山桜』と題する戦没学徒兵たちの手記集を出版した。それは明らかに『きけわだつみのこえ』に対抗するものなのだが、この開催に関わった遊就館幹部のひとりが、こんな発言をしている。

『きけわだつみのこえ』は、ある思想信条、限定した考えのもとで編集された本ではありますが、その『きけわだつみのこえ』を読んで、この特別展に来られた方もおられるんですね。いくら編集者がある一定の方向に導こうと編集しても、亡くなった方の遺書から伝わるところは伝わって、この特別展に来られ、そしてまた遺書にあるまごころの尊さを感じられている<sup>1)</sup>。

『きけわだつみのこえ』の编者たちのほうも、「戦没学生は今も「軍神」とし、「英霊」として靖國神社に祀られており、天皇制を支える柱の一つ、靖國信仰を温存するために利用されている」<sup>2)</sup>と靖國への非難はつねに忘れてはいないが、ともあれ、わだつみ会の編集方針と靖國神社のそれとの重大な違いが、一般の読者の前では霞んでしまって気づかれない場合もあることがわかる。この事態について、本当ならば靖國神社はもっと怒るか焦るかしなければ

ばならないはずなのだが、靖國神社としては、「ある思想信条、限定した考えのもとで」編集するという偏りを自分たちはもっていない、と主張するほうがまずは大事であるらしい。

靖國神社のこの満々たる自信にたいして、わだつみ会は、靖國神社に指摘されるまでもなく、自分たちの編集が偏っているのではないか、いや、それどころか、故意にではないとはいえ遺稿の字句を改変・削除してしまったのではないかと自己批判をつづける。それは、度重なる、わだつみ会の内紛や訴訟騒動にまで発展した。こうしたわだつみ会の苦悩を救ってくれるのは、「いくら編輯者がある一定の方向に導こうと編輯しても、亡くなった方の遺書から伝わるところは伝わ」という、靖國神社の信念だけなのであるが、その善意の心がわだつみ会には伝わらないと見える。

1949年に東京大学消費生活共同組合出版部から出された最初の『きけわだつみのこえ』、あるいはこの戦没学徒兵遺稿集編纂の原型となった、東大戦没学生手記集『はるかなる山河に』（1947）は、よく知られているように、帝国主義侵略戦争に心のなかで反対しつつも、そして大東亜戦争の大義を疑いつつも戦死しなければならなかった高学歴者たちの葛藤を描いている、というより、靖國神社の怒りを買っているように、そのように読まれるべく編集されている。

しかし、意図的編集じたいは別に非難されることでもあるまい。考えてみれば、他者の（しかも、しばしば死者たちの）言葉を、ある意図をもって編集・引用していく（または引用しない）というのは、たとえばこの拙稿も実はそうである（かもしれない）ように、論考の構造となっている場合も多いのではないかと。ただ、自分自身の構造に言及したりしないだけである。

『きけわだつみのこえ』の特徴は、わざわざその編集の意図を述べる点にある。つまり、その偏向的（？）編集のために繰り返しかえし繰り返しかえし非難を浴びてしまうのは、自分自身の所為なのだ。

この点に関して、最初の『きけわだつみのこえ』の序文として付けられた、フランス文学者渡辺一夫東大教授の「感想」が決定的な役割を演じた。わだ

つみ編集の問題が取り上げられる時には必ず引用される渡辺の言葉は、のちのちまでも『きけわだつみのこえ』を予想外のかたちで縛ることになったのである。渡辺は「感想」の冒頭にこう書いている。

編集に当たっては、組合出版部の方々が議論を重ね、その結論を顧問格の僕が批評し、更に出版部の人々が協議して、ようやく方針が決定したのである。僕としては、全体の方針を、肯定し、適切だと思っている。初め、僕は、かなり過激な日本精神主義的な、ある時には戦争謳歌にも近いような若干の短文までも、全部採録するのが「公正」であると主張したのであったが、出版部の方々は、必ずしも僕の意見には賛同の意を表されなかった。現下の社会情勢その他に、少しでも悪い影響を与えるようなことがあってはならぬというのが、その理由であった。僕もそれはもっともだと思った<sup>3)</sup>。

この発言のポイントは、しかし、若干の短文をカットしたこと、すなわち遺稿を操作したことではなく、わざわざ括弧付きで用いられた「公正」という部分にある。渡辺が続けて、「形式的に「公正」を求めたところで、かえって「公正」を欠くことがある」と述べているように、もはや反駁の機会をもたない死者たちを誤解のなかに放置するのは「公正」ではなかろう。誤読と悪用から死者たちを守ってやることが、むしろ「公正」を求める態度となるのではあるまいか。

初版あとがきは、渡辺の序文の意味を駄目押しの補足する。

この書に満ちみちている、真実を見る目をふさがれ、虐げられ、酷使され、そして殺されていった若いすぐれた人々の痛切な訴えが、却って、再びまた戦争を招来しようとする人達によって逆用されることを心配した私達は、渡辺一夫、小田切秀雄の両氏に願って、この書の「読みとり方」を書いて頂いた。こうした「解説」を敢えて附けねばならなくした

のが、敗戦後、この編集が進められていた四年間の、日本社会の足どりであった<sup>4)</sup>。

この最初の序文やあとがきに見られるように、読者による誤解を避ける、あるいは、読者に他の「読みとり方」を許さないのが、『きけわだつみのこえ』の方針であった。と同時に、その方針を貫徹するために、自分たちが編集をしていることを隠さず、手の内をすべて明かしてみせる（ように見える）方法を採用したのだった。以後、『きけわだつみのこえ』の種々のあとがきや解説には、くどいほど遺稿の取捨選択の理由が述べられる。

渡辺一夫の発言は、おとぎ話のはじめにかけられた呪いのように、登場人物たちを動かした。それはまず、「かなり過激な日本精神主義的な、ある時には戦争謳歌にも近いような若干の短文までをも」含んだ『戦没学生の遺書に見る十五年戦争』（1963年刊、のちに『第二集 きけわだつみのこえ』と改題）の出版へと導く。

そして1995年、わだつみ会は、岩波文庫の『きけわだつみのこえ』を絶版とし、「新版」と称するものを出版するに至る。その根底にも、渡辺の呪いを今度こそ解こうという気持ちがあったと見ていいだろう。

長くわだつみ会の活動に携わった経済学者の岡田裕之の論考に拠れば、「新版」編集のきっかけは1993年8月にNHKで放映された番組、『長い航路五十年目のわだつみの声』であるという。『はるかなる山河に』と『きけわだつみのこえ』の編集の中心的役割を担った中村克郎（当時わだつみ会理事長）の自宅に保存されていた、ある手記の筆写稿に残された黒線削除がテレビに大写しになり、中村じしんが、自主検閲による「遺稿操作」を認めたかのように受けとれる発言をしたのだった<sup>5)</sup>。

このことから、渡辺発言によって植えつけられていた、遺稿の改竄・削除にたいする疑惑、というか、原初的不安が、わだつみ会の幹部たちのなかで一気に大きくなり、「新版」作成へと踏みだすことになった。だから、「新版」では、遺稿の「いわゆるテキスト・クリティークを厳密に」行ない、恣意的

な中略を避けて「できるだけ全文を採録」するという方針が採られる<sup>6)</sup>。

しかし、その「いわゆるテキスト・クリティーク」を新たなる、もっと悪質な「遺稿操作」と見なした、著作権者の遺族（とりわけ、改竄疑惑にはじまる内紛のために理事長を追われた中村克郎）たちと、わだつみ会とのあいだでトラブルが生じ、「新版」の出版差止請求の訴訟にまで発展する（99年に和解成立）。この件については拙稿では触れえないが、ただ、「遺稿操作」＝編集への意欲と、それゆえに始終まとわりつく不安は、『きけわだつみのこえ』の運動力そのものなのである、と指摘しておきたい。社会学者の野上元は、次のように言いあらわしている。

じっさい、保阪〔正康 中村克郎の立場から「新版」とわだつみ会の態度を批判している〕の描いたように、日本戦没学生記念会（通称「わだつみ会」）による『きけわだつみのこえ』の歴史は、削除や改変の歴史でもあった。すなわち、一つの「わだつみのこえ」、決定版の「わだつみのこえ」など、どこにもないのである。〔……〕岩波書店による『新版きけわだつみのこえ』が出版され、「テキスト・クリティークを厳密に」施したものととして完全版を自負するにいたるのだが、今度そこには「アジアへの加害責任を意識できるように」という新たな編集方針が暗に加わっている。別に変わるところはない<sup>7)</sup>。（傍点原文）

しかし、「暗に」というのは、すこし違う。「新版」あとがきのなかでも、例のごとく、「当時の学生たちが侵略戦争を担わされるにいたった冷厳な事実を直視し把握することができるような新版をつくって世に問うことを、わだつみ会がいわば必然の課題とする」<sup>8)</sup>と、編集の意図、そして読者への「読みとり方」の教示もしくは強制が明確に宣言されているのである。もっとも、「新しい読者が、思いもかけなかったような新しい読み方をしてくれるかも知れない」と言い添えることも「新版」は忘れていないのだが。

### わだつみ vs み霊

こうした『きけわだつみのこえ』の編集方針は、靖國神社のような立場からは自虐的と呼ばれるのだろうが、自虐性が最もよくあらわれているのは、「アジアへの加害責任」云々のところではなく、操作された編集物であることをみずから明かさずにはいられない態度においてである。さらに注目すべきは、「きけわだつみのこえ」と名乗っていながら、あるいは、うっかり名乗ってしまったがゆえに、その声をうまく聞いてもらえないのではないかという、読者にたいする不信感が存在することだろう。それで、わだつみ会内部からの批判は、たいてい次のようなかたちをとる。

まずは、第二次わだつみ会の安田武理事の批判。

ありていに言えば、『わだつみ』の編集方針の基本的姿勢に欠けていたのは、死者の言葉を死者の言葉のままに、まるごと聴こうとする「生者」の姿勢の謙虚さなのであった。死者の言葉のままではなくて、それを生者の「配慮」によって取捨選択するという、だから、やはり広義には政治的といわねばならぬ配慮が過剰であった<sup>9)</sup>。

次に、第三次わだつみ会で活躍したが、「新版」出版後の1996年に脱会している画家の森馨子。

『きけわだつみのこえ』の死者たちの死を目前にした〈こえ〉を、論理の不整合だの思想の価値だの矛盾だの……そんなことはどうでもいい。それよりも彼らの〈こえ〉に静かに耳を傾けたいと思う。〔……〕『きけわだつみのこえ』を騒々しく圍繞してきた「政治的」なる状況をなお生き継いでいる私たちが、彼らの〈こえ〉に応え得るものはなんなのか、残る歳月を賭けて考えねば死者に申し訳がたためではないか<sup>10)</sup>。

そして、中村克郎は、『きけわだつみのこえ』が1982年に岩波文庫の殿堂入りを果たしたとき（これが「旧版」に当たる）あとがきを次のような言葉ではじめている。

わたしはいままでこの書物の編集にたずさわった者として何も語らなかった。死者のことが語ってくださるのであって、編者ごときが何を語り、しゃしゃり出る必要があるのか、と思っていたから<sup>11)</sup>。

「死者」の側に立つ「生者」は、反論を許さないような堂々たる頑固さをしばしばもつが、その点にはとりあえず触れず、これらの発言に含まれる「遺稿操作」にたいする批判にのみ注目すれば、「死者」の声は如何<sup>いか</sup>ようにも聞こえてきてしまうが、それでいいではないか、もっと素直に耳を傾けようではないか、というのが発言の主旨なのであろう。

『きけわだつみのこえ』の編集方針が、ここで自己批判されているように、「死者」の声の多義性を（おそらく善意から）阻止してしまうのにたいし、靖國神社的編集にとっては、「死者」の声ははじめから、聞き間違えようなく一義的である。それどころか、『いざさらば我はみくにの山桜』の編者は、はっきりと「死者」の声を聞く。「面影を臉にえがき〔特攻隊慰霊〕碑前に額ずいた時、「後は頼むぞ！」の御声が聞こえてきました」<sup>12)</sup>と、序文に記されている。

『いざさらば我はみくにの山桜』では、天皇陛下と「大東亜戦争」の大義のために喜んで命を捧げた学徒兵たち、という編集の意図は、むしろ『きけわだつみのこえ』における「侵略戦争」の強調よりもあからさまであるが、しかし、編者には編集という意識はまったくないし、したがって編集の意図を書くこともない。編集なんてそんなバカなまねをしなくとも「み<sup>たま</sup>霊」そのものが自然に語ってくれるというわけなのだ。中村克郎わだつみ会理事長の言葉を使うと、「死者のことが語ってくださる」……。

このような非編集の宣言は、『いざさらば我はみくにの山桜』よりも、1978年に出版された『いのちささげて 戦中学徒・遺詠遺文抄』において、さら

に明確に謳われている。これは、国民文化研究会なる団体によって出版された学徒兵遺稿集で、ここから四人の戦没学生が『いざさらば我はみくにの山桜』にも選ばれた。また、『いのちささげて』は、登場人物や編者がきわめて高学歴である点で、原初の『きけわだつみのこえ』のかたちになく、似ているがゆえにその反対物の位置を獲得していると言っていい。

『いのちささげて』の故郷も、『きけわだつみのこえ』と同じく、東京帝国大学である。やや脇道に逸れるが、『いのちささげて』の出自に、触れておかねばなるまい。

国民文化研究会の理事長で、この「戦中学徒」遺稿集の編者代表である小田村寅二郎・亜細亜大学教授は、戦前に東大小田村事件として知られた騒動の主人公なのだ。小田村は、旧制一中時代には丸山眞男の同級生で、それなりに親しかったらしいが、浪人を重ねた小田村が、旧制一高を経て東大生になったときには、丸山のほうはすでに助手になっていた。因みに、小田村は、1935年に一高が本郷から駒場に移転するさい、自治寄宿寮の委員長として、重い一高護國旗を徒步行進で掲げつつ運んだそうである。現在の一高ホームページに、一高護國旗を立てて皇居遥拝する、若き日の小田村委員長の写真が飾られている。

東大法学部に進学した小田村は1938年、同部の講義を西洋かぶれで日本精神と天皇を侮辱するものとして糾弾する論文を雑誌に発表し、当時蓑田胸喜によってすすめられていた東大法学部糾弾運動との絡みもあって、学内に大きな混乱を引きおこした。この右翼による一連の帝大バッシングは、小田村のかつての同級生丸山眞男助手を相当に悩ませることになる<sup>13)</sup>。

井上義和の研究に拠れば、小田村の無期停学処分への抗議がきっかけとなって、右翼学生運動が全国的組織の活動へと大躍進したのだという。小田村が属していた東大精神科学研究会（学外団体としては東大文化科学研究会）が発展的に解消し、全国の大学や旧制高校、高等専門学校の学生をも引きこんだ日本学生協会ができた。

『いのちささげて』は、この日本学生協会に所属した戦没学徒兵たちの遺



稿集なのだ。この本で「戦中学徒」という特別の言葉が使われているのは、「学内にはびこつてゐた『日本の精神文化に対する輕蔑の言辞、またそれらを不問に附してゐた『学風、に対して、学生の身を以て身を挺して戦ひ続け、つひに不幸にも病魔に斃れていつた諸君』<sup>14)</sup>」も含まれているからである、と小田村は序文で述べている。

東大精神科学研究会の前身は、一高昭信会という旧制一高内の国家主義的組織であったので、この事実からも、われわれがついもっている、高学歴インテリと左翼または自由主義という結びつきのイメージに反するものが出てくるだろう。井上義和は、「旧制高校的な教養主義が右傾培養器としても機能し、かつての左傾学生と比べても遜色ない規模の学生が国家主義団体に結集したこと」<sup>15)</sup>に注意を促している。

『いのちささげて』にあらわれる、比較的裕福なインテリ家庭、高学歴、そして何より文学的な教養は、『はるかなる山河に』や『きけわだつみのこえ』と共通するものだが、唯一違うのが、「み霊」と「声」の存在なのである。

遺族を訪ね歩いて集めた膨大な資料を前にし、これをどう編集するか、取捨選択するかは、『いのちささげて』の六人の、やはりかつて日本学生協会の会員であった編集委員たちをも悩ませたらしい。しかし、解決はおのずとやってきた。あとがきのなかで、六人の編集委員はそれぞれに「亡き友のみ霊のみちびき」に感謝している。

それから今日まで、山をなす資料をどう選別するかといふことを初めとして、思案にあまることばかりであったが、兎にも角にも無我夢中になって仕事をしてみると、不思議にも自然に解決の方法が浮かんで来て、亡き友らのみ霊のふゆを蒙ぶりつつこの作業をしてゐるのだなあ、と思はずにゐられなかった。

亡くなられた方のみ霊は、三十三年目にして神になるといはれる。そのことに気付いたのは編集作業も終りに近づいた八月のことであった。不思議な思ひにさそわれたことであった。まことに神となり給ふみ霊の

呼び声によってこの本は世に出た、と思はずにはゐられない。そしてその声はまた、`私のあとに続いてくれ、と、我等に語りかけてゐる様な気がしてならぬのである<sup>16)</sup>。

これでは、うまく「声」を聞くことのできないわだつみ側はすっかりお株を取られてしまうかたちになる。しかし、堂々と爽やかに（右翼）エリート主義を掲げている『いのちささげて』は、わだつみの、あの奇妙な負い目を刺激することもなく、わだつみにとっては案外恐くないものなのである。

### わだつみ vs 農民

さて、わだつみの負い目とは何なのか。

みずからも東大在学中に学徒出陣し、戦後わだつみ会の理事を務めたフランス文学者の平井啓之は、わだつみ会は60年代後半から天皇制批判の運動に大衆とともに取りくむことによって、そのエリート性をようやく脱しえた、と1986年に振りかえっている。これが事実なのかどうかは問わない。平井がその際、「会」がエリート集団であり、上下二冊の『きけわだつみのこえ』も、それが戦時中の例外的エリートたちの「こえ」であり、したがって大衆とは無縁である、とする、過去三十数年にわたって繰り返された批判<sup>17)</sup>（傍点原文）といった表現を使っていることに、まずは注目したいのである。こうした発言から、『きけわだつみのこえ』編集のもう一つの推進力が、（左翼）エリート主義を脱却しなければならないという強迫観念であったことがわかってくる。

そもそも『きけわだつみのこえ』を編集しようという運びになったのも、『はるかなる山河に』が東大戦没学生（したがって旧制高校出身者）だけを取りあげていたことへの反省からであった。こういう負い目をもったわだつみ会に最も大きな衝撃、いや感激を与えたのが、1961年に岩波新書として出版された『戦没農民兵士の手紙』だったのである。

発足したばかりの第二次わだつみ会は、この東北農民兵の記録が出版され

る前からすでに、「わだつみ学徒兵の場合とはまた異なった戦争体験の豊かな生活的側面を照らしだすもの」<sup>18)</sup>として高く評価していた。『戦没農民兵士の手紙』は出版されるとたちまち、朝日ジャーナル、日本読書新聞、赤旗、東京新聞、東大新聞などに好意的な書評が出て大きな話題となる。俗に言う朝日・岩波・東大系の、とはすなわち、わだつみ系の言論人が諸手を挙げて絶賛したわけである。そして今度は反対に、現在でもよく見られるインテリ批判だが、庶民の生活実感やら東北人の素朴な心情やら農民の「つたない筆」やらに「ダラシなく感動してしまう」<sup>19)</sup>進歩的文化人風の態度が批判された。この「農民兵士論争」は、主にわだつみ会内部を舞台として展開される。

いま、拙稿では『戦没農民兵士の手紙』の内容にも、「農民兵士論争」の経過にも触れない。また、農民兵が、書評子たちが感動的に読みとったように、真面目で健全な、平和志向の下積み兵士であったのか、それとも、たいていの学徒兵が苦々しく体験したように、インテリ兵を階級的憎悪からいじめぬいた古兵だったのか、も追及しない。われわれにとって重要なのは、ここでも編集の問題なのである。

「農民兵士論争」の見取り図を提出する赤澤史朗は、「論争に参加したすべての論者は、この編者の「まえがき」と「あとがき」での理解や解釈を念頭において、それに対する自己のスタンスを定めて議論している」と、重要な指摘をしている。論争が起きた一つの原因は、「編者が「まえがき」「あとがき」によって提示した解釈が、読者の本の読み方を強く縛る力を持っている」<sup>20)</sup>ことにあった。好意的な書評は、編者の解釈に忠実に寄り添うものであり、厳しい批判は、そうした能天気な寄り添いにたいする疑念から出ている。

では、なぜ編者（岩手県農村文化懇談会）の解釈が、非難ばかりされるわだつみの場合とは違って「読者の本の読み方を強く縛る力」をもちえたのか。編者たちは、ただ手紙を引用するだけで本文中には何の解説も挟まなかった理由を、「誰が書くにしても不可避免的に主観が入ってくる、とくに懸念されるのは変に意図的なものになる危険もある」と述べているし、「私たちがそれらの手紙をどのように読みとったか」を記す前には、「人それぞれが、それぞれ

の思いで読んでいただければよいのですし、またそうあるべきですが」と丁寧な断り書きを入れている<sup>21a)</sup>。

この控え目さにもかかわらず（実はだからこそ）なぜ「読者の本の読み方を強く縛る力」をもったのか。第一には、赤澤の言う「独自性」のお陰であろう。東北の農民兵こそ日本一強い兵隊さん、わが帝国陸軍の中核だという平凡な伝説と、庶民の奥底には平和を愛する心があるはずだという、戦後平和主義の平凡な信念を、思いがけず結びつけた非凡性である。

しかし、この点は確認するだけにとどめておいて、現在のわれわれにとっては、それほど「読み方を強く縛る力」をもっていないのはなぜなのか、と問い直してみよう。われわれには、東北農民という階層がもはやリアリティをもって迫ってこない。『戦没農民兵士の手紙』のまえがきは、こう書きはじめられる。「岩手県農村文化懇談会のわたくし達は、農民の「たましい」に学ぶ文化運動をつづけている」<sup>21b)</sup>。この一行は、いわゆる都会人やいわゆる知識人に一撃を加える力をもはや有さない。

『はるかなる山河に』と『きけわだつみのこえ』は、ある一つの社会階層の戦争体験を語るものであり、だからこそ価値をもっていたのだが、読者の反響が大きくなればなるほど、わだつみ関係者じしんが、学徒兵の経験だけでは足りないと思うってしまったし、読書人たちもそう感じていた。日本人兵士の多数派であった農民兵たちのお言葉を受けいれる心の準備はすでに万端整っていたのである。と同時に、高度成長時代の初期にあたる1961年には、かつてのかたちの階層構造が終わりを迎えつつもあった。

1959年に、『きけわだつみのこえ』が、当世人気のあったカッパ・ブックスの一冊としてよみがえったとき、小田切秀雄はあとがきで次のように言っている。

この手記は、学生だけの特殊性という面もあるが、同時に、自己の内心を、ついに表現する機会もなく、方法も知らずに、型どおりのことばだけを残して死んでいった無数の将兵、とくに若い兵士たちの代弁にも

なっているのである<sup>22)</sup>。

こうした日本人「代弁」説に対抗して、「上下二冊の『きけわだつみのこえ』も、それが戦時中の例外的エリートたちの「こえ」であり、したがって大衆とは無縁である、とする、過去三十数年にわたって繰り返された批判」が根強く存在するわけである。「代弁」か「無縁」か、それとも農民兵士のほうが「代弁」者の役割を果たしているのか。これにたいする答えはしばらく保留しておくが、戦没者たちの手記・書簡を集めたものが、ある一定のグループまたは階層というかたちでなければ、なかなかまとまりをもたないことは事実であろう。『戦没農民兵士の手紙』しかり、『あゝ同期の桜』しかり。

よい例証を、わだつみ会じしんが提供してくれている。1963年にわだつみ会が『戦没学生の遺書に見る十五年戦争』を編集したおり、「学生に限らず広く他の諸階層の戦没者を網羅する『十五年戦争戦没青年の手記』を編むという構想を立てた」という。ところが、当然のことながらまとまらず、「国民的な戦争体験の全体像を再構成することは目下のところ不可能であると判断せずにはいられなかった」<sup>23)</sup>。

ある階層がどのように戦争を受けとめたかを示すかたちの書簡集しか成立しにくいということは、反対に言えば、われわれが受けとろうとするのも、戦争の悲惨とかいうよりも、ある階層の戦争体験から見える、ある階層の特徴なのである。この意味で『はるかなる山河に』や『きけわだつみのこえ』は、きわめて成功したアンソロジーであった。そしてこれらの本を現在読むと、ある階層がいまや消え去ったことが実感できるのだ。

### わだつみ vs .ドイツ

消え去ったものを確認するため、ここで最後に、こうした日本の戦没者手記集のお手本となった『ドイツ戦没学生の手紙』を見てみたい。『はるかなる山河に』の編者によるあとがきには、次のように記されている。

私達はこの本〔『はるかなる山河に』〕に似たものとして『ドイツ戦没学生の手紙』を持っている。この本の多くの手記がこれについてつづられ一様に或る感激をもって読み終わった事をするしている。それはたしかに感激に値する本だ。しかし私達はそれよりもこの本を推したいと思う。ことに編集態度について私達はヴィットコップに数等まさと自負している。彼がドイツ至上主義を吹き込む事を主眼としたのに対して私達は人間性を強く出す事を目的とした<sup>24)</sup>。

『ドイツ戦没学生の手紙』は、フライブルク大学のドイツ文学教授ヴィットコップによって、戦争まっさかりの1916年に編集・出版された書簡集で、その時は『ドイツ出征学生の手紙』と題されていたが、1918年の末、すなわち第一次大戦敗戦直前に現在の題名で出版された。しかしそう話題にもならず、十年後の1928年に大幅に増補されて再出版されると、今度はベストセラーとなり、ナチス政権樹立直後の1933年の秋には安価な普及版が出る。

黄金のワイマール時代に出版されたものと、1933年に出た普及版は、後者に、28年以降に新たに収集された敗戦直前の手紙が数通加えられただけで、まったく同じものである。付け加えられた手紙が、ナチス的というのではない。ただ、あとになって当局から、戦争反対とも受けとれる手紙の削除が要請され、元からいた二人の学生が姿を消した。それでも、別に発禁になったわけではなく、ナチス時代にも版を重ねた戦争本の一つであった。因みに、1929年出版の『西部戦線異状なし』はナチスによる焚書の犠牲になっている。

ヴィットコップ教授は、政権が変化するごとに、その都度まえがきをすこしずつ変えていくことで、つまり「読みとり方」の重点をずらしていくことで、彼の愛する書簡集をほぼそのまま生き延びさせた。しかし、これはヴィットコップの日和見主義的適応力が優れていたからというより、この書簡集そのものの性格のお陰だった、とドイツ人研究者は指摘している<sup>25)</sup>。『ドイツ戦没学生の手紙』は、如何ようにも読めてしまうため、右はナチスから、中程の穏健保守派や聖職者を通して、さらに左翼的自由主義・平和主義陣営に

まで好意的に評価されていたという。

『はるかなる山河に』の編者が、ヴィットコップの「編集態度」を非難しているのは、邦訳版が1933年のまえがきを載せているからであって、そこではたしかにヴィットコップは「ドイツ至上主義」を強調し、ナチス政権樹立を「国民的自覚のこの時」<sup>26)</sup>として言祝いでいる。しかし、手紙の内容は、ワイマール時代のまえがきに「諸国民の生活のなかで、世界を和解させるような新しい法と合意への一つの刺激になってほしい」<sup>27)</sup>と記されもした平和志向の書物と同じなのである。

邦訳版『ドイツ戦没学生の手紙』は1938年11月、最初の岩波新書の一冊として出版された。したがって、『きけわだつみのこえ』ではなく、『戦没農民兵士の手紙』のほうが出自からしても題名からしてもその正嫡なのである。

新書創案者の吉野源三郎の回想に拠れば、岩波新書は、当時の神がかり的の国粋主義や軍国主義、中国大陆への侵略を批判する資料を提供しようという意図のもとに創刊されたという。しかし「もちろん、時勢が時勢ですから、このような考えを正面から主張して叫んでも、そんな出版物は国民の手に渡る前に警察に押さえられて、著者も出版者もともにつぶされてしまうばかりです。〔……〕そのためには、この双書に入れる本のヴァリエティーや組み合わせ、著者の顔ぶれに、特別な苦心がいりました」<sup>28)</sup>。

という次第で、邦訳版は、百二十余名の学生の手紙から五十余名のものを選んだ抄訳となった。全員の手紙が訳されたわけではなく、ひとりの学生のすべての手紙が訳されたわけでもなく、また、選択された手紙であっても、巧みに部分削除されている場合もある。『はるかなる山河に』で非難されている「編集態度」、あるいは「特別な苦心」は、むしろ日本側の問題だったのだ。もちろん、友好国であるナチス・ドイツの出版物が翻訳ものとして選ばれたのも「特別な苦心」の一つなのだろう。

岡田裕之はドイツ語原著に触れてみてはじめて、日本人訳者による「削除と恣意的な選択」の事実を知って愕然としたという。岡田が詳しく調べているように、邦訳版で削除されているのは、厭戦的・反戦的な言辞、平和への

願いである。この削除は訳者のドイツ文学者高橋健二と岩波編集者吉野源三郎による自主検閲だった。

岡田は、「ヴィットコップ編の原本と高橋健二選定の訳本のこの本質的違いは、もちろん一九二〇年代ドイツと一九三〇年代末日本の時代の本質的相違から生じたものだ」と指摘している。しかし、すでに述べたように、抄訳の原本となっているのは、まえがきだけが違う、ナチス時代の普及版なのだから、ナチスも許容していた部分が日本では削除されたことを意味するのだ。高橋健二の名誉（？）のために付け加えておけば、「たとえば明白に平和を主張している、ベルリン大学哲学科学生、東部戦線で戦死したピーターゾンの手紙はすべて訳されていない」<sup>29)</sup>と岡田は怒っているが、ピーターゾンは手紙削除が命じられた二名の学生の内のひとりなので、すでに原本にもなかったと思われる。

では反対に、抄訳された手紙は何を基準に選ばれ、編集されたのであろうか。高橋健二の訳者序文を読んでもみると、それが明確に浮かびあがってくる。ヴィットコップがまえがきで特別に言及している三人の学生の手紙がそろって、祖国再生ための犠牲を宣言しているのにたいし、下記の引用に見られるように高橋健二が挙げているのは、塹壕のなかでゲーテの詩集を部下の兵士たちに読み聞かせたという学徒将校の名前である。

開戦当時、ドイツの本屋では、ゲーテのファウストや、ニイチェのツァラトゥストラや、ヘルダーリンの詩など、第一義的な文学書が盛に売れたという事実は、「戦争中ドイツ文学は塹壕の中で最も真剣に読まれた」という文学史家の言葉を裏書するものであるが、その具体的な例証を本書中、ヴィリ・ナウマンその他の手紙に見出すことが出来る<sup>30)</sup>。

そして実際、邦訳版には読書にまつわる内容をもつ手紙が多い。ということは、高橋によって特に選ばれたと見ていいだろう。高橋健二は戦後になっても、この読書選択説を補強している。



同じ訳者が、フライブルク大学のヴィットコプ教授編の「ドイツ戦没学生の手紙」を訳出したのは、丁度十五年まえであった。当時は日華事変のたけなわで、軍国精神のいやが上にもあおられていたころであったので、第一次大戦の際ドイツ帝国に殉じた学生の表白は異常な感激をもって日本の青年に迎えられた。国内はもとより、外地の戦場からも、訳者に感想を寄せられた青年の数は少なからず、個人的なつながりを持つようになった人々さえあった。しかし、ドイツ学生の愛国的な精神だけが日本の青年を感動させたのではなかった。一応はそうであったけれど、次第に、塹壕のなかでファウストを読むドイツ学生の姿、カロッサの「ルーマニア日記」に見るように、砲煙のなかにあっても、絶えず自然に目を開き、自分の魂を凝視する瞑想者の精神が、日本の青年をひきつけるようになったのであった<sup>31)</sup>。

興味深いことに、ヴィットコプ教授が1915年に、戦後すぐに出版されるはずの書簡集の構想を記したパンフレットのなかで、学生たちの手紙の内容を特徴付けるものとして挙げているのも、「個々人を彼の世界観の源泉と奥底へと、つねに新たに連れもどす読書」なのである。ただし、その書物は「ドイツの最も偉大な作家」たちの作品であるから、ナショナリズムのあらわれの一つであった<sup>32)</sup>。

かくて、『はるかなる山河に』と『きけわだつみのこえ』のなかの最も有名な一節である、中村徳郎（中村克郎の兄）の言葉は、こうなる。

再び『ドイツ戦没学生の手紙』を読む。何回繰返して読むも良い。ここ〔兵営〕にいて読むと殊に感銘が深い。彼らは真摯だ。塹壕の中で、蠟燭の灯の下で、バイブルを読み、ゲーテを読み、ヘルダーレーンの詩を誦し、ワグナーに想いを寄せる彼らは幸福である。寄せ得る彼らは<sup>33)</sup>。

すでに引用した『はるかなる山河に』のあとがきに、「この本の多くの手記がこれ〔『ドイツ戦没学生の手紙』〕についてつづられ一様に或る感激をもって読み終わった事をするしている」と書かれていたことからわかるように、この東大戦没学生手記にも、『きけわだつみのこえ』にも読書経験と書物、しかもいわゆる岩波の古典や名著をめぐる話題が実に多いのである。つまり、そのような手記や書簡が選ばれたということだ。

『きけわだつみのこえ』の登場人物たちは、必ずしも皆が旧制高校の出身者ではないが、旧制高校的な読書習慣と文学趣味を身につけている。そうでなければ編者によって選ばれなかったろう。

野上元は『戦後思想の名著』において、「われわれが『わだつみ』を「古典」と錯視してしまうのは、むしろ『わだつみ』のなかに、古今東西の「古典」が埋め込まれていたから」<sup>34)</sup>(傍点原文)であろうと、いくぶん皮肉を込めて述べている。中村克郎に拠れば、岩波文庫入りしたときには、「愛読した岩波文庫にのってさぞかし故人も喜ぶと思います」といった言葉が遺族たちから寄せられたという<sup>35)</sup>。

本をよく読むような階層の若い人たちが大量に戦争に駆りだされるという事態は、日中戦争が勃発した1930年代後半(すなわち岩波新書発刊のころ)になってはじめて日本人が直面した新しい経験だった。だから、実はこの時分から、大学卒業者たちの軍隊体験記や遺稿集が続々と出版され<sup>36)</sup>、戦没学徒兵たちの手紙の収集も帝国大学新聞によって、おそらく『ドイツ戦没学生の手紙』をまねてであろうが、すでに1944年からすすめられていた<sup>37)</sup>。その場合も読書や学問は、インテリ兵士たちの書き物のメルクマールとされている。言うまでもなく、新しいタイプの兵士がそのインテリ力と読書力で、いかに見事に大日本帝国の新事態に対応しているか、いかに役に立つか、という視点である。

『はるかなる山河に』と『きけわだつみのこえ』も、まずは、こうした戦中からの流れのなかに位置づけられねばなるまい。ただ、視点が平和主義になっただけなのだ。

分断線は敗戦の地点にあるのではなく、戦後のどこかの地点で、編集の側でも受容の側でも、読書する階層という刻印が消えたわけである。しかし、戦中に出版された遺稿集や体験記の詳しい考察も含め、この件については稿を改めて論じたい。

## 註

- 1) 小峰美光他「靖國神社が伝える戦歿学徒の「真実」 特別展「学徒出陣 蘇る殉国学徒の至情」開催にあたって」『祖国と青年』（日本青年協議会、1993年5月号）32頁。
- 2) 「新版刊行にあたって」『新版 きけわだつみのこえ』（岩波文庫第12版、2005）502頁。
- 3) 渡辺一夫「感想」同書9頁。
- 4) 「初版あとがき」同書473頁。
- 5) 岡田裕之「日本戦没学生の思想（下）」『新版・きけわだつみのこえ』の致命的欠陥について」『大原社会問題研究所雑誌』（No. 579、2007）32頁。
- 6) 「新版刊行にあたって」498～499頁。
- 7) 野上元『戦争体験の社会学 「兵士」という文体』（弘文堂、2006）206頁。
- 8) 「新版刊行にあたって」506頁。
- 9) 安田武『人間の再建』（筑摩書房、1969）35頁。
- 10) 森馨子「死者の＜こえ＞に聴け」『わだつみのこえ 日本戦没学生記念会機関紙』（1992年第95号）69頁。
- 11) 中村克郎「岩波文庫旧版あとがき」『新版 きけわだつみのこえ』486頁。
- 12) 大野俊康「はじめに」『いざさらば我はみくにの山桜』（靖國神社、1994）7頁。
- 13) 竹内洋『丸山眞男の時代』（中公新書、2005）第一章参照。
- 14) 小田村寅二郎「はしがき」『いのちささげて 戦中学徒遺詠遺文抄』（国民文化研究会、1978）3頁
- 15) 井上義和「戦時期の右翼学生運動 東大小田村事件と日本学生協会」竹内洋編『日本主義的教養の時代 大学批判の古層』（柏書房、2006）155～203頁参照。
- 16) 「あとがき」『いのちささげて』449頁。
- 17) 平井啓之「わだつみ会の一九八六年 エリート性からの脱皮」『シナリオ きけ、わだつみの声』（日本戦没学生記念会、1986）
- 18) 山下肇「会の現段階を考える」『わだつみのこえ 日本戦没学生記念会機関紙』（1960年第3号）5頁。

- 19) 野添憲治「知識人の農民観」『思想の科学』(1961年36号)89頁。
- 20) 赤澤史朗「農民兵論争」再論」『立命館法学』(2000年第271・272号)626~627頁。
- 21a)「あとがき」岩手県農村文化懇談会編『戦没農民兵士の手紙』(岩波新書アンコール復刊版、2000)221~336頁。
- 21b)「まえがき」同書1頁
- 22) 小田切秀雄「この本の新しい読者のために」『きけわだつみのこえ』(光文社カッパ・ブックス、1959)233頁
- 23)「あとがき」『第二集 きけわだつみのこえ』(光文社カッパ・ブックス、1963)278頁。
- 24) 野元菊雄「失われなかった人間性」『はるかなる山河に 東大戦没学生の手記』(東大新書版、1951)227頁。
- 25) Manfred Hettling und Michael Jeismann: Der Weltkrieg als Epos. Philipp Witkops "Kriegsbriefe gefallener Studenten." In: *Keiner fühlt sich hier als Mensch. Erlebnis und Wirkung des Ersten Weltkriegs*, hrsg. von Gerhard Herschfeld. Essen (Klartext) 1993, S. 182.
- 26) *Kriegsbriefe gefallener Studenten*, in Verbindung mit den Deutschen Unterrichts Ministerien, hrsg. von Philipp Witkop. München (A. Langen) 1933, S. 6.
- 27) *Kriegsbriefe gefallener Studenten*, in Verbindung mit den deutschen Unterrichts Ministerien, hrsg von Philipp Witkop. München (Georg Müller) 1928, S. 6.
- 28) 吉野源三郎『職業としての編集者』(岩波新書、1989年)16頁。
- 29) 岡田裕之「高橋健二抄訳『ドイツ戦没学生の手紙』について」『わだつみのこえ 日本戦没学生記念会機関紙』(2005年第122号)89~95頁。
- 30) 高橋健二「訳者序」ヴィットコップ編(高橋健二訳)『ドイツ戦没学生の手紙』(岩波新書、1938)2頁。
- 31) 高橋健二「訳者のまえがき」ヴァルター・ベール/ハンス・ベール編(高橋健二訳)『ドイツ戦没学生の手紙(第二次大戦版)』(新潮社、1953年)6頁。
- 32) *Kriegsbriefe deutscher Studenten*, hrsg. von Philipp Witkop. Leipzig (Panther) 1915, S. 5.
- 33)『新版 きけわだつみのこえ』238頁。
- 34) 野上元「きけわだつみのこえ」岩崎稔他編『戦後思想の名著』(平凡社、2006)97頁。
- 35) 中村克郎「岩波文庫旧版あとがき」『新版 きけわだつみのこえ』496頁。
- 36) たとえば、太田慶一『太田伍長の陣中日記』(岩波書店、1940)、革新社編『日本出征学生の手紙』(第一公論社、1940)、河野忠次『学生兵の手記』(三省堂、1942)、権

## 編集と誤読

藤實『兵営の記録』(大日本雄弁会講談社、1944)など。

- 37) 平野英雄「戦没学生の手記は戦時中から始まっていた」『わだつみのこえ 日本  
戦没学生記念会機関紙』(1994年第99号)参照。